# 内科同窓会リレーエッセイ　「中村先生からのバトンを受け取り」

一條眞琴（55 回）

人間にとって人生の転機点は何か所かあるものと思います。わたくしも 71 歳になって、「あの時、この道を選んでいればどういう人生をたどったかな」など時々考えます。今回「内科同窓会リレーエッセイ」のバトンを私の尊敬する循環器中村芳郎先生からいただき、あの時を思い出しました。

貯金を使い果たしアメリカ留学から帰ったのは 1989 年か 1990 年のころだったかとおもいます。幸い慶応病院の助手にしていただき給料はもらっていましたが生活するのもやっとの時でした。そんな時、慶応病院地下の売店前で中村先生にお会いし、私の懐状況をご存じであったのか、突然「君パートはあるのかね？」と言われました。とっさに「ありません」と答えたところ「神経内科を欲しがっているところがあるので紹介してあげる」とおっしゃられ、循環器高橋先生の野村證券健康管理室を紹介していただきました。私にしてみれば雲の上の存在の、ましてや循環器の助教授でいらっしゃる中村先生からタイムリーなお声がけをしていただき、ただただ感激しうれしく思ったものです。そして野村證券では大変よくしていただき、今でも本当に感謝いたしております。

その後しばらくして、午後のある日、食研 2 階の神経内科の医局に一人でいた

とき、後藤教授が医局にこられ、「一條君、中村先生の申し入れ断っておいたから」と突然言われました。何のことかわからず、「え？」といったところ「老年科は続かないから、断っておいた」と言われました。「はー？」と何もわからないまま答えたことをいまでも鮮明に記憶しています。当時私は老年科ができることも知らず、具体的な自分の進路も考えていなかったため、中村先生のお考えを今回のリレーエッセイを通じて初めて知りました。あの時中村先生のお考えを知っていたら私はどのように変わっていたのか、私の進路はどのようになっていたのか、いましみじみと考えています。ちなみに私は現在神経学会以外に老年病学会にも所属し、老人保健施設の施設長をしています。まわりまわって老年医学にたずさわっています。そして愛用の聴診器はラパポートです。

次のバトンは私の尊敬するもう一人の先生、49 回神経内科天野隆弘先生にお願いしたいと思います。